

したがって、シュッツは、本来の現象学、たとえばエポケーのような実践ではなく、生活世界の意味分析という方向に進んでいきました。さらにいえば、その中心となったテーマはウェーバーの掲げた理解社会学、すなわち、意味の主観的解釈に基づく日常生活の研究でした。他者理解の方法には通常二つあります。一つは「外在的方法」、もう一つは「内在的方法」です。前者は文化人類学において、先述したフィールドワークの方法、さらにソシュールの記号論を社会における交換の分析に適用したレヴィストロースの構造主義的分析として具体化されていきました。他方、後者はそれまで大きく見落とされてきた、と指摘されていきました。⁽¹⁰⁾それが現象学的社会学 (phenomenological sociology) として、シュッツによって明確にされたのです。

現象学的社会学は意味の社会学ともいわれます。シュッツは、私たちの日常生活の世界、常識的な活動、日々の何気ない現実、自明なものごと、などに視点を向けました。人々は、日常生活のおのこの場面で相互的行為やコミュニケーションを通じ、現実の意味づけや秩序化を行い、絶え間なしに現実を再構成している。つまり、現象は経験された事実でなく、意味であり、記述される現象は観察者の付与する意味にほかならない、という視点です。

シュッツは、観察者が他者を理解する過程では、「客観的に」観察が行われているのではなく、実は観察者の「自己解釈」が前提となっている、ということを指摘しました。ところが、観察者たる文化人類学者は、その自己解釈についての知的方法論を有していない。そこで、現象学的実践として、生活世界の分析を進めるといふ考え方を打ち出したのでした。

シュッツの方法は、フィールドワークのそののように具体的ではありませんが、現象学と社会学を日常という場において融合し、体系づけるための概念化、枠組みの構成を行ったといえます。こうしたアプローチに沿って、現代社会学の一ジャンルであるエスノメソドロジー（日常生活における人々の方法、民族誌）の展開などにも大きな影響を与えました。エスノメソドロジーはアメリカの社会学者H・カーフィンケルによって提唱されましたが、その課題は、人々の日常生活の営為や、常識的な活動のなかに潜む自明性を解明することにあります。たとえばエスノメソドロジーでは会話分析が利用されます。母親が子供に何かをしつけるとき何気ない会話に注目して、どのようにしてルールや知識を与えようとするのかを分析するといった例があげられます。

また、シュッツ以降のもう一つの流れとして「シンボリック相互作用論」を紹介しておくべきでしょう。これは、物事の意味というのは、社会的相互作用によって、シンボルを媒介に構成されるものであると考え、そのプロセスを分析しようとするものです。ただしそこでは、分析者が操作的に分析を行うのではなく、その現実の内部者（行為者）の視点に立って、彼が解釈する主観的意味を受動的に再構成しようとするアプローチがとられます。さらにこれを進めたのがI・ゴフマンで、社会的現実における相互作用の状況を「ドラマ（演劇）」⁽¹⁾としてとらえ、行為者の表現行為（記号行為）のドラマトウルギーという視点を提示しました。

社会的知識の統合

こうした一連の社会学的探求のレベルを、人間社会の場において統合しようとしたのがアメリカの社会学者、P・バーガーやT・ルックマンでした。バーガーは師であるシュッツの影響を受け、社会学から哲学にわたる広い分野に目を向けました。そして従来からもあった知識社会学 (sociology of knowledge) などの領域を革新し、現在にまでつながる新たな研究を展開しました。

ここでいう知識とは、社会的に共有された暗黙知まで含めた日常的な現実の中にある知識、人々がふだんから知っているありふれた知識のことです。常識的知識 (commonsense knowledge) とは私たちが日常生活のルーティンのなかで共有している知識です。バーガーとルックマンによれば、現実とは社会的に構成されているものです。以上の知識という視点からどのように社会が構成されるかを分析するのが、知識社会学だといえるのです。それは「意識構造と制度的構造との関係を取りあつかう」ものです。たとえば、正当化 (legitimation) とは、すでにある社会的システムに客観性、妥当性を付与して、社会にとって「もつともらしいものにする」プロセスです。

彼らは、知識社会学の新たな領域を広げました。すなわち、「行為と構造」に着眼して理解しようとしたウェーバーの社会学を、現象学を援用して社会的相互作用を通じた知識や意味の形成に注目したシュッツを経山して、それらをありふれた日常社会の現実において統合していったのです。日常的な事柄、日常そのものを知識の問題としてとらえ、現実が社会的な力で形成されていくという

ことを解明したのがバーガーとルックマンでした。

こうした米国の社会学は、主にさまざまな形で現代社会の現象を解き明かす力として大きな展開をしました。一方で、英国ではA・ギデンズ(1938-)が構造化理論(theory of structuration)を打ち出して、個の行為と社会的な力の弁証法的な相互作用がどのように社会を形成するのかという問題を明らかにしました。その主張は、人間(個)が変化の媒介(エージェント)となつて継続的に社会的構造を再生産する、というものでした。しかしそれだけでなく、そのことによつて、個(行為)が社会(構造)に対しての変化の要因となりうるという観点をもたらしめました。両者は相互に密接に関わりあい、不可分なものであり、人間は環境の影響を強く受けつつも、主体的に環境を変えていくのです。すなわちギデンズの視点は、構造と行為の関係をマクロ対ミクロとしてとらえるのではなく、ミクロ、マクロのどの場においても構造と行為の関係がある、といつていいものでしょう。⁽¹²⁾ただし、そこでは単に行爲者である個の意図や動機が作用するのではなく、彼の知識にもとづく認識能力(knowledgeability)による実践が中心的概念となつている点が鍵です。

このようなギデンズの考え方は、社会現象の解明だけでなく、政治問題(ギデンズは英国のブレア政権のブレーンとして知られる)や都市問題、そして当然経営学にも影響を与えました。たとえば、イノベーションにおける個と組織と環境間の相互作用の問題、といった観点です。因みに、こうした行為への観点を日本の経営学に最初に取り込んだのは先述の沼上幹で、経営実践家と経営研究者が行為のシステムを内省的に対話することの重要性を指摘しています。

潜在的な場への視点

私たちは社会学やフィールドワークを軸に、新たな知識が概念化されていく方法論をみてきました。社会学では、ウェーバーの理念型に代表されるように、見えないプロセスや構造、意味を抽出発見することが狙いでした。そうした見えざるものを見るようにする際、ウェーバーは価値自由を謳い、独自の視点を持つことを示したのです。ただ、同時に、その自由とはドグマであってはならず、つねに概念や意味、あるいは因果を示すときには謙虚でなければならぬとも説きました。たとえば現象学はこうした私たちの物事への認識の構造を問うおす知的基盤として作用したのでした。

以上のような知識社会学等への発展は、社会科学の知の発展進化のバックボーンともいえるものですが、ただそれにとどまらず、私たちの現実的課題としての知識創造における、見えざるものの取り出し方にとって重要な示唆となる枠組みとなるといえます。

さて、この先には何があるのでしょうか。「見えざる」世界の構造を個人（意識）と社会（制度）との関係で見たときに、そこには二つのアプローチがあります。その一つは、知識社会学に集約されたような、「人間の信念を解釈し、その信念の社会的文脈と社会的帰結とを分析する方法」です。そしてもう一つは、「信念に基づく行為の外的背景と客観的制約に注意を集中するアプローチ」です。⁽¹³⁾

後者は、社会的あるいは組織的メカニズムを把握しようとするものだといえるでしょう。その代表

的試みは、ギデンズあるいは、古典的には、生産様式や生活様式が人間を制約すると考えたマルクスなどによるものだといえます。それは、個と場の関係を構造的に把握して、深い構造に着目し、ダイナミックに全体をとらえていく弁証法的なアプローチともいえます。

そこでさらに、私たちは見えない意味のレベルから、その背後にある潜在的メカニズムの把握、というレベルに目を向けて行きたいと思えます。

潜在的メカニズムの発見へ

第三のアプローチ

それでは、直接経験を超えて、潜在的な場のメカニズムが見えるような方法論はあるのでしょうか。ここでこの第二部の冒頭で紹介したパスカーの超越的实在論を再度取り上げたいと思います。超越的实在論は、科学における現実とは何かを再考するもので、要素還元的な実証科学の根源にある、(実験中心の) 経験主義的实在論に向けられて提唱されました。しかし、それは実証科学への単純な批判ではなく、また実証科学に対する批判的立場としての観念主義アイデアリズムとも異なるものといえます。すなわち、この二つの対立する双方を、弁証法的に展開していくのが超越的实在論の考え方です。

科学の古典ともいえる実証科学は、閉じたシステム内での実験や経験を重んじます。それは、特定の事象の経験を越えることができません。一方、反実証主義は、ここで「I・カントに代表される「超越的理性主義者」とも呼ばれ、人間が見ることができなもの、できないものは何かを問題にして、人間が思念することを優先する認識論的アプローチです。それは、逆に自然現象の現実を軽視すること

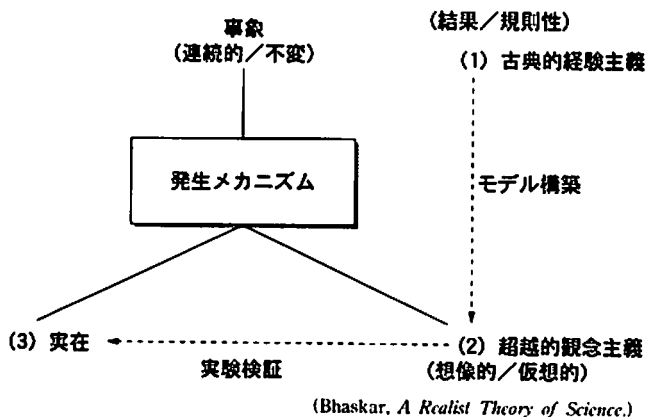


図 2-4 科学的発見の論理

につながります。人間が見ることのできるものだけを秩序立て、説明しようという知覚論や認識論は、どうしても観念論に陥ってしまうのです。

これらに対して、人間からは見えない、宇宙や自然社会の現実の中に、本来的に存在するメカニズムの解明こそが重要である、という指摘が、超越的実在論という形でパスカーによってなされたといえます。それは単に閉じられた経験からの実証でもなく、認識された世界のモデル化でもありません。これら二つのベクトルをともし取り入れて、現実には潜むメカニズム（発生メカニズム *generative mechanism*）を、経験的でありつつ抽象的・超越的に取り出す方法論です。この第三のアプローチは、人間の目には見えないが、現実の中に隠れて実際に現実を動かしているメカニズム、パワー、傾向を解明する科学的方法論を確立しようとするものです。それは、実証主義と反実証主義的な観念主義の弁証法的総合 (*dialectical synthesis*) と

もいえるものです。

すでに述べたように、現代の知は、一九世紀までの実証主義の批判から生まれたものです。反実証主義的な側面だけとらえて、ひっくりめれば「ポストモダンの知」とも見えてしまう。現代の知は、実証主義がその成立条件とする客観性や真理の絶対性に疑問を提示したといえます。けれども問題はポストモダンがどうなのか、ということではありません。実証主義と反・実証主義的態度の混在という私たちの知の現状です。

たとえば、経営学の分野でも、自然科学と共通項を持つ実証主義あるいは分析的な方法群（財務計量マーケティング）と、きわめて人間的・社会的な方法群（リーダーシップ論、感性的マーケティング）が混在しています。そればかりか、それぞれがまったく異なる主張や思考体系を持っていることはよく知られていると同時に、批判の対象となっています。

バスカーによれば、超越的実在論的アプローチはこれまでも明確な形ではないものの、実践されてきました。例をあげましょう。カール・マルクス(1818-83)の仕事は、こうした方法論の好例です。マルクスの目指した科学的社会主義は、近代社会の経済的運動法則を社会の内側から明らかにすることを目的としていました。そこでは、外部的な社会的「現実」事象と、内部的な本質的運動という二つの側面の違いを認識することが出発点となりました。マルクスにとって、社会科学は自然科学同様の精密さで本質が事象に与える影響を明らかにするものでした。こうした姿勢やアプローチそのものが、まさに超越的実在論と同じものだったのです。

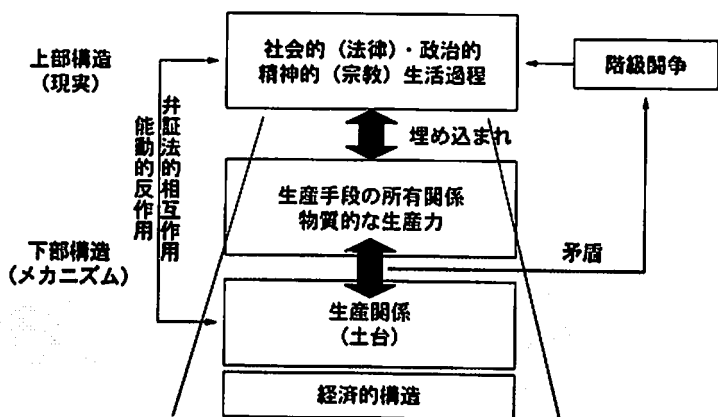


図2-5 マルクスの生産力と生産関係の因果とメカニズム

マルクスは、社会関係に目を向けました。ある個人は、特定の関係においてはじめて経済的・社会的存在となります。つまりその背後にある社会的関係こそ重要です。なかでも生産関係は、最も基本となる社会的関係です。奴隷も市民も同じ人間に変わりはありません。しかし、特定の社会的関係において、人間は奴隷になったり、市民になったりするので、人間は自ら生活を社会的に形成する一方で、その意志にかかわらず、物質的な生産力に照応する、見えざる「生産関係」に取り込まれていきます。こうした関係のメカニズムを明らかにすることはじめて社会全体の理解が可能となります。

この観点は、人間がある社会的現象を意識して形成しているのでなく、社会的現象にはそれ自身としての特定の深層メカニズムや実体が存在する、という超越的実在論の見方と同じです。

マルクスは社会を「土台」（下部構造）としての経



濟的構造と上部構造に分け、土台における生産関係と生産力という見えざる要因が、上部構造を規定していると考えました。そして生産関係と生産力の間の矛盾（とくに生産手段の所有関係）が、階級的搾取関係、階級対立を生じさせます。したがって、矛盾を孕んだ生産関係が続く限り対立は解消しません。しかし、社会の生産様式は歴史とともにダイナミックに発展・変化していきます。マルクスはこの矛盾が解消されるべく発展を遂げるのが必然と考えたのです。ウェーバーとマルクスはそれぞれに本質的因果関係を発見しつつ、資本主義の明るい面と暗い面を浮かび上がらせたのですが、こうしてみたとき、マルクスはさらに超越的実在論的思考によって、そのメカニズムを把握したのでした。

経済学における方法論の復権

バスターンらによって唱えられてきた超越的実在論は、最近では経済学に持ち込まれています。経済学は、その意味で社会的存在や社会的現実を記述する社会学的方法論の復活を経験しているといわれます。イギリスではポスト・ケインジアンから経済哲学に進んだ、ケンブリッジ大学のトニー・ローソンがその旗手とされます。

従来の経済学は、統計的な帰納的アプローチ、あるいは所与のモデルの実証分析、あるいはモデルの応用や適用といった演繹的アプローチであり、とくに後者は閉鎖的なモデルを経済事象にあてはめ

てみせるといふ考え方に基づいていました。したがって、超越的實在論の立場からいえば、これまでの方法論はいずれも眞実を見出すことができない、といふのです。

ローソンなどによって用いられているのは「状況的合理性 (situated rationality)」と呼ばれる概念です。経済的な個や組織はそれ自身として独立して存在するのでなく、一定の社会的関係を前提として成立しています。たとえば個人は自由に経済的選択ができる能力を持っているわけではありませぬ。個人は社会的文脈を前提として意思決定をする。それぞれの経済的役割がそれぞれに自身の文脈に従って行動する。このため、非合理にみえる対立も、決していずれかの非合理性の証とはならないのです。この背後には社会的知識はきわめて状況、文脈依存的に構成されている、というものの見方があります。重要なのは潜在的な発生メカニズムであつて、生じた結果ではないのです。繰り返し観察される事象をいかに分析するかについて、ローソンは社会は開放的なシステムであつても、潜在的メカニズムは継続的に再生産されるといいます。すでにおわかりのように、これはバスカーが指摘したように、マルクスが適用した方法論なのです。ローソンらの進化経済学の思考は、新種の方法論ではなく、むしろ世界の異なつた見方です。それは、経済的事象を数量化して、その分析を行ない、予測するといふ従来の方法論に対する批判なのです。

レトロダクション (アブダクション) によるメカニズム把握

ローソンは、社会的にみた経済的事象の背後にある、隠されたメカニズムを見出すには、演繹でも

帰納でもない、(パースの示唆した) 仮説推論 (アブダクション) や遡行推論 (レトロダクション) のアプローチが、ふさわしいと指摘しています。

しかし、いかにして (本質的と思われる) 潜在的な構造などについての知識が得られるのだろうか。批判的実在論における議論での答えは、必要とされる本質的手法は帰納法でも演繹法でもなく遡行推論 (レトロダクション) である。

(Lawson, "Critical Issues in Economics as Realist Social Theory.")

さらに、ローソンは、レトロダクションには、アナロジーやメタファーの方法が基礎となると語っています。すなわち、潜在的メカニズムを把握する過程では、命題や仮説を創造するアブダクションのアプローチが必須であり、さらにその表象にはメタファーが有効であるといっているのです。

ここでメタファーは単に何かを言い表すための装飾語、つまりレトリックにとどまらず、見えない本質やメカニズムを伝え、さらに新たな洞察を発見するものです。事象の背後にある発生メカニズムを把握、伝達する仮説推論のプロセスにおいて、重要な役割を果たします。複雑なメカニズムは、直接的な記述では複雑なままで理解しにくい。そこでメタファーが、それ以外の表現ではできないような仕方で説明してくれるのです。異なる分野や文脈に近似したメカニズムを発見し、それによって示すことができる、といっているのです。たとえば「電気のショートが発火の原因となる」という電気メカニズムを表すメタファーは、「夜間氷点下が続くことでブラジルのコーヒー収穫に被害を与える」ことや、「吹雪が出社率に影響を与える」といったこと (コードが擦り切れるなど局所的トラ

ブルによって導線同士が接触し、回路によって決められた道を電気が通らず、そこに大電流が流れ、コードが過熱したり発火する。さらには回路が停止してしまうを説明しやすくします。

メタファーやアナロジは、既存の何かを表現するだけでなく、複雑な、あるいは見ることのできないものごとをわかるようにしたり、さらに新たな意味やコンセプトを創出する際に有効です。メタファーの意義についてはさらに第三部で触れることにします。

新たな経営の知に向けて——総合の知

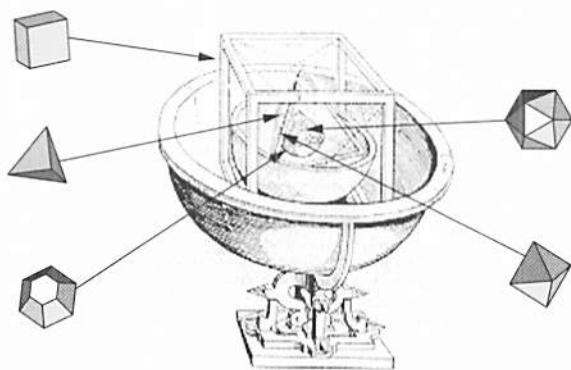
複眼多面の知識

渾濁的だけでも帰納的だけでもない、ダイナミックなアプローチが求められるのは経営においても同様です。経営の知とは、執拗な総合の知の追究である。これがわれわれの主張です。今後経営においてナレッジワーカーが主役となるなかで、これまで論じてきた哲学の知の伝統と社会科学の知のフロンティアは必然的に直接的影響と関与をもたらず、と考えられるのです。

総合の知とは、すなわち知の本質としての多面的な性格を言い表しているものといえます。知は多面体 (polyhedron) だ、といわれることがあります。私たちはなかなか事象や事物についての知識全体を一つの像として把握することはできませんが、さまざまな角度から眺め、感知することで全体を知ることができます。「多面体としての宮沢賢治」⁽¹⁴⁾ という表現や、人事の多面評価制度がそうです。これらは多面体という言葉をもたふアとして使っているのです。

いわゆる「プラトン立体」は、五つの立体で宇宙の知識を表現したものです。プラトンは「ティマ

ケプラーの宇宙



(オリジナルは1619年、*Harmonices Mundi* 『世界の調和』)

図2-6 知識は多面体

イオス』の中で、世界を構成する元素とは何かを問い、火を正四面体、空気を正八面体、土を正六面体、水を正二十面体、正十二面体をエーテルになぞらえてとらえる試みを行っています。J・ケプラー(1571-1630)は、このプラトン立体を用いて宇宙の構造を構想しました(『宇宙の神秘』*Mysterium cosmographicum*)。それは、太陽を中心に六つの惑星(水星・金星・地球・火星・木星・土星)が、五個の正多面体に順次外接・内接するという「知識の模型(モデル)」だったので、プラトンの多面体の世界理解は一つのメタファーであり、「知識」自体の視覚的理解に重要です。世界はさまざまな部分としての面で構成されていますが、必要なのは、それらを各面部分的にとらえる視点ではなく、全体を把握する大局的視点です。複眼的視点、マルチな視点と呼んでもいいでしょう。さまざまな視点が面として取り込ま

れた多面体を作り上げていくことが知識創造といってよいでしょう。たとえば、合理—経験、主観—客観といった哲学的な知の対立項も多面体を構成する一つの面であり、全体を構成するものとして対立を超えて理解することが可能になります。

「知の知」とは、こうした知識、すなわち真理に接近する能力です。それは論理的な真理の追究という側面だけではありません。五感も知性も、仮説と事実も、多様な要素を（左脳も右脳も）駆使して総合することなのです。

荻谷剛彦はさまざまな知を組み合わせた「複眼的思考法」を提示しています。それは、「ものごとを一面的にとらえるのではなく、その複雑さを複数の視点から把握する方法……「常識」や「ステレオタイプ」なものを見方をするることによる思考停止に陥らずに、考えることの継続・連鎖を生み出すような思考法」です。その思いは、こうしたら常識や、「偏差値教育」、「いじめ」、「IT革命」、「情報化社会」、「グローバル化」といった与えられたステレオタイプや常套句にとらわれずに、自分自身の視点からものごとをとらえられるかを考えていくことにあります。それは、疑問を感じることを、簡単に納得しないこと、矛盾や発展を含む、いわゆる「正解」信仰とは対極にあるものです。

複眼的思考法とは⁽¹⁵⁾

① 創造的な批判的読書法

「ほかの文章になる可能性のあったもの」、「私だったらこう書いたかもしれない」、「どうして著者は、こんなことを書いているのか」など文章を「未完成品」として批判的に読む

② 創造的な作文法

自分の考えを表現しようとすることの過程自体が、考える力を強める重要な契機となっている

③ 問いのたて方と展開のしかた

「問いのブレイクダウン法」——大きな問いを複数の小さな問いに分けていって、それぞれの問いに答えることが最初の問いの解答になるようにしていく方法

④ 概念の働きを利用する複眼思考法

思考停止には、ステレオタイプの発想以外に個別事情にこだわりすぎて起こるものがある。これを回避するには「概念」の導入が効果的である。「概念化」から出発し、個別的なレベルから一般的レベルまで抽象度を高めて、ものごとをとらえる。

⑤ 複眼的思考のための三つの方法

1 関係論的なものの方

「ものごとの二面性に注目する」——ものごとの二つ、あるいはそれ以上の要素が相互に関連しあっている関係の束と見なす。目の前にある一つの現象は、実際には複数の力（ベクトル）の集まりによって、一つの姿として現れている、と考える

2 逆説パラドックスの発見

「行為の意図せざる結果」へのまなざし

例…マックス・ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」

プロテスタントは儉約と節度を求める禁欲的な生活態度をとった、にもかかわらず、資本主義という金儲けのシステムを「行為の意図せざる結果」として招いた

「行為の意図せざる結果」への着目↓「逆説パラドックスの発見」↓「常識」をくつがえす発想

3 問題そのものを問うこと

複眼思考の第三の方法は、問題のとらえ方自体をもっと根底からずらしていくやり方、としての「問題を問う」こと
メタを問う問いのかたち

「ある問題を立てることで誰が得をし、誰が損をするのか」の視点

たとえば複数の調査研究の方法を組み合わせて総合するという多面的な比較研究法は経営の分野に

も応用されています。加護野忠男他の「日米企業の経営比較—戦略的環境適応の理論」は、日米企業の環境適応原理を明らかにした研究ですが、こうしたケーススタディや質問票調査を多面的に組み合わせた総合的方法を日本の経営学では最初に本格的に採り入れた例だといえます。

総合の知——対話

では、私たちは多面的な知識からいかにして全体的な知を新たに構成していけばいいのでしょうか。多面体ということは、立体を構成する各面は矛盾や対立を含んでいる、ということです。これらを前提に、新たな関係を生み出すのが総合だといえます。

総合といってもいくつかパターンがあります。たとえば、

□ 整理一貫させる、まとめる（インテグラル／積分）——これはいわゆる総合メーカーの「総合」に近いレベル。

□ 化学的結合（融合する、異化をとまなう）——これは新しい構成物を生み出しますが、次元は高まりません。

□ 相乗効果。

□ 弁証法的総合——相互に矛盾する定立と反定立とを「アップヘイベン止揚する」こと。正反合の「合」にあたる。

この中でわれわれが重視したのが弁証法的総合でした。というより、弁証法には元来こうした総合の知のエッセンスが含まれていました。ヘーゲルについては触れましたが、哲学的な埃を取り払っ